

「得意なもの」チェックリストを用いた事例研究

—発達障害児の「興味」に基づく教育支援の検討—

野 添 絹 子

はじめに

日本におけるマイノリティ集団の一つとして、障害児・者が挙げられる。このような集団の学力保障の問題を考える場合、二次的障害から学ぶことを放棄してしまう発達障害児が多い中で、どういった教育支援を行えば学力保障につながるのか、という議論は重要である。

発達障害のある児童・生徒は認知機能に凸凹があり、通常学級に在籍、もしくは通級で特別支援教育を受ける子どもの場合、総合すると境界知能（IQ70～85あたり）になることが多い。認知機能に凸凹がある子どもは、画一的な授業方法では内容を理解することは難しい。そのため、一人ひとりの認知的個性に合わせた教育方法を用いることによって学習を個性化し、障害を補償しながら得意な認知領域を伸ばす、アメリカで行われている2E（twice-exceptional）教育の教育方法が役に立つ⁽¹⁾。

2E教育とは、発達障害児の「才能を伸長」させ、「障害を補償」する教育支援を二重に行う教育である。具体的には、治療教育のみを行うのではなく、アセスメントによって得意な認知領域（才能）を伸ばしながら、得意なことを活用して障害箇所を補償する。その際に、認知特性に合わせた教育方法を用いたり、子どものもつ興味を教育支援に活かしたりする。

一方、日本では、1990年代末から「学力低下」に関する議論が起り、子ども達の学習意欲の低下に関する政策文書が多く出されるようになった。その流れの中で、興味や関心を基に学習意欲を高めようとする教育政策が問題視されるようになった。

このような背景の下、本研究では、興味を活用した教育支援を単純に否定するのではなく、認知機能に偏りのある発達障害児に対して有効であるか否かを検証するために、子どもの得意なもの、興味の対象を容易に把握するための「得意なもの」チェックリストを開発し、検証を行う。

本稿は、まず、学習の個性化について概説し、発達障害児にとっての意義を考察する。つぎに、千葉県市街の公立小学校の特別支援学級担任であり、研究協力者でもある、北川圭一教諭と共に筆者が作成した「得意なもの」チェックリスト実施の理論的根拠を述べた上で、事例分析を行う。最後に、事例分析に関する考察と、これまでの実践を振り返り、今後の課題を検討する。

1. 発達障害児にとっての学習の個性化とMI

学習の個性化は、アメリカにおいて、個に応じる個性化教育概念として構築された。その代表者と

して、トムリンソン（Carol Ann Tomlinson）がいる。彼女は、教育の個性化を目指し、一人ひとりの違いに応じて、教授・学習を異なるものにすることを提唱した⁽²⁾。トムリンソンによれば、授業の個性化とは、子どもの持つレディネス、興味、学習プロフィールという特性の違いに応じて、学習内容、学習過程、成果を違うものにする方法を計画、実行することを意味する。

個性化教育が注目された背景として、1970年代から、人の認知発達には多様で、到達する過程も到達点も異なるため、その多様さが学習の際に個人差として現れる、という観点からの類型化が盛んに行われるようになってきたことが挙げられる。以前は、人は全ての発達領域において、同年齢のときに同一の発達段階をたどり、誰もが同じような認知構造をもつとする、ピアジェらの単純な解釈が支持される傾向があった。しかし現在は、このような認知発達の多様さが支持されることが多い。このことは、特に認知機能に凸凹のある発達障害の子どもたちの教育に多様性をもたらす。

ガードナー（Gardner, H.）が提唱したMI理論は、このような個性化教育実践の主要な支柱とされてきた⁽³⁾。MI理論は八つの知能から構成されているが、これらの知能は均一に発達するのではなく、人によって様々に発達すると言われている⁽⁴⁾。MIは、統計手法上の不備が指摘され、実証性に疑問を持たれているが、それでもガードナーは、それぞれの知能には独立した固有の発達歴があることを、心理学、精神医学分野の研究成果を援用して提示した⁽⁵⁾。MIと認知機能を単純に結びつけることはできないが、発達障害の認知機能の凸凹にMI理論を応用することが可能ならば、発達障害の子どもは得意なものや苦手なもの、興味の対象を容易に把握できることになる。

2. 才能チェックリストを用いた、発達障害児の得意の自己評定

2-1 実施の理論的根拠

筆者らは、MI理論をベースにして「得意なもの」チェックリストを作成し、特別支援学級に在籍する子どもたちの「良いところ」や「興味の対象」を見つけて教育支援に活かし、苦手であったり、困難であったりする学習を補う、教育方法の工夫を協同で行った。つまり、得意なものをアセスメントによって体系的に見つけて、それを教育支援に活かす試みである。

特別支援教育においては、効果的な支援を行う上でアセスメントは欠かせない。たとえば発達障害の疑いがあるかどうかといったことを判別するためには観察・理解シートが用いられるし、さらに、知能検査や発達検査、言語・コミュニケーションに関する検査、知覚に関する検査、社会性、運動、LD判断などに関する検査、人格に関する検査等がある。これらの結果が分析・解釈され、教育支援の方向が決定される。

項目の合計数が基準を越していたら発達障害だと判断され、特別な支援が始まる。嫌でも自分というものを特別視してしまうだろう。それが将来、二次的障害に結びつく可能性もある。さらに、これらは専門家によって厳粛に行われ、ある程度、時間もかかる。子どもによっては、検査を受けると聞くだけで萎縮してしまうこともある。そこで、得意なものや興味の対象を容易に見つけることができる「得意なもの」チェックリストの実施が考えられる。それによって得意なものが分かり、「興味の

対象」を教材として用いれば、効果的な学習が行える。

従来から障害児教育においては、「興味・関心」に基づく課題が柔軟に活用されてきた経緯があり、障害の重い知的障害児の教育においては、長い経験や成果がある。しかし、知的障害のない発達障害の子どもに対しては、このような取り組みは、それぞれの教師が時折試みる程度であった。そのため、「興味・関心」に基づく教育支援を体系化するための事前調査の一つとして、事例研究を行う。

2-2 才能チェックリストの作成

筆者らは、小学生用の才能チェックリストを開発した。これは、元々、松村暢隆がMI理論を基に、中学生用に開発した才能チェックリスト⁽⁶⁾を参考にして、小学生用に作成されたものである。（その後、改訂版を作成）

MI理論は、言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能、身体運動的知能、空間的知能、対人的知能、内省的知能、博物的知能から構成されている。発達障害の子どもは、障害特性から社会性が十分に育っていなかったり、人とのコミュニケーションを苦手としたりする場合が多い。さらに、自身を振り返って内省することに困難を示す子どもが多いことから、対人的知能と内省的知能を除外した。その代わりに、レンズーリ（Joseph S. Renzulli）の「才能の三輪概念」のうち、「課題への傾倒性」を「熱中性」として含めた。さらに、PATH（Planning Alternative Tomorrow with Hope）⁽⁷⁾を参考にして、教育支援を将来の仕事につなげるために、「将来の夢」を含めた。

「得意なもの」チェックリストは、小学生用に、なるべく平易な言葉を用いて、身近なものを題材に選び⁽⁸⁾、設問を少なくして短時間でできるようにした。さらに、なるべく一人でできるように、漢字にルビをふった。

① ことばで

- ・調べたことや考えたことを文にするのは……得意・？・苦手
- ・遠足の話やその日にあったことを思い出して書くのは……得意・？・苦手
- ・友達と交換日記をつけることは……好き・？・きらい
- ・本や雑誌を読むことは……好き・？・きらい

② 推理・数字で

- ・買い物に行ったら、合計金額を自分で簡単に計算……できる・？・できない
- ・時計や模型の車などの動く仕組みを考えるのは……おもしろい・？・つまらない
- ・アニメ「コナン」を観ながら犯人やトリックを推理するのは……得意・？・苦手
- ・ナンプレのように、数字の問題を考えるのは……得意・？・苦手

③ 空間イメージで

- ・地図を見て、町の様子を想像するのは……得意・？・苦手
- ・見たものや体験したことを思い出して立体的に絵を描くのは……得意・？・苦手
- ・ショッピングセンターの中で、一度行ったことがあるお店は迷わずに行けると……思う・？・思わない
- ・自動車の前、横、上の形がどのようになっているのかを想像……できる・？・できない

- ④ 熱中性
 ・任天堂 DS などを行っているとき、時間のたつのがわからなくなるくらい……………
 熱中する・？・熱中することはない
- ・ポケモンに出てくるピカチュウ、アーボック、マグカルゴなどの
 キャラクターの名前、特性、進化の流れなどを…………… いえる・？・いえない
- ・電車のことなら、誰にも負けないくらいの知識が……………ある・？・ない
- ・大好きなこと（ゲーム以外）なら、集中して何時間でも……………やれる・？・やれない
 それは何ですか？ _____
- ⑤ 体を使って
- ・実際に体を動かして体験しながら学ぶのは……………得意・？・苦手
- ・パソコンは、マニュアル（解説書）を読むよりも、自分で適当にやってみて使い方を覚える方が
 ……………やりやすい・？・やりにくい
- ・ボールやなわとびを使って遊ぶのは……………すき・？・きらい
- ・自分の手を使って工作するのは……………得意・？・苦手
- ⑥ 音楽の要素で
- ・好きなアイドルの曲やアニメソングを聞くことは……………すき・？・きらい
- ・好きだと思った曲のメロディや歌はすぐに……………覚えてしまう・？・覚えられない
- ・歌を歌うことは……………すき・？・きらい
- ・好きな曲が流れてくると、自然に体や手でリズムを……………とってしまう・？・とることはない
- ⑦ 自然物などを見分けて
- ・花や木、石などの細かい特徴を見分けるのは……………得意・？・苦手
- ・犬やネコ、カメなどを飼ったり、花を育てたりするのは……………すき・？・きらい
- ・宇宙や地球のことに興味が……………ある・？・ない
- ・昆虫を見つけてつかまえるのは……………すき・？・きらい
- ⑧ 将来の夢
- ・将来、なりたいものが決まっている……………はい・？・いいえ
- ・それは何ですか？ _____
- ・そのために、具体的にどうしたらいいと思いますか？

2-3 才能チェックリストの実施

A) 本事例校選定の理由

本校は、当市の特別支援教育のセンター校になっており、近隣の7校の小学校から発達障害の児童が集まることから、調査対象校に選定した。

B) 本事例調査の目的と方法

本事例調査は、上記の「得意なもの」チェックリストを用いることにより、発達障害児の学習意欲向上を促すことを目的としている。エスノグラフィーを用いて、2010年5月より同年7月までの数回に及ぶ参与観察、担任教師である北川教諭への聴き取り調査、及び同教諭の観察記録を分析・検討したものである。

C) 調査対象者

「得意なもの」チェックリストを北川教諭が担任を務める K 学級で実施した。K 学級とは、週に 1 回、1 校時から 5 校時までの 1 日、ふだんは通常学級で学習している児童が、国語や算数、ソーシャルスキルなどを学習するために通級する自閉症・情緒障害特別支援学級である。1 日あたり、4 名から 6 名の子どもを 2 名の教師がそれぞれの課題に応じて指導・支援している。子どもの障害としては、ADHD、アスペルガー症候群、LD が主である。計 12 名の児童に「得意なもの」チェックリストを実施した。

D) 実施の手続き

2010 年 5 月に、3 年生以上のすべての児童を対象にチェックリストを実施した。読字や読みとりの面で難しい子どもがいるので、そばに教師がついて一つずつ読み上げたり、内容の意味を確認したりしながらの実施となった。(7 月に実施した改訂版チェックリストは、一人で読んで回答ができる 6 年生にのみ、実施)

2-4 実施の結果

以下の A さん、B くん的事例報告は、北川教諭の観察メモを基に同教諭に聴き取り調査を行い、その際の内容をまとめたもの（枠内）に、筆者が考察を加えたものである。

・A さん（4 年生）アスペルガー症候群

チェックリスト結果：〈熱中性〉が全体的に高く、特に漫画や本を読むことが好きで集中する。「将来、漫画家になりたい」という。

WISC-R の言語性、動作性 IQ は、共に 120 台と高い。週 4 日、母学級⁽⁹⁾での学習には、だいたい落ち着いて取り組んでいるが、週に 1 回 K 学級にいくと、4 日間のストレスを解消するかのように自分の好きな活動を行ってしまうことが多く、国語や算数などの学習は、気が進まないことが多い。本を読むことは好きで、読み始めると本だけに集中してしまい、教師の言うことはなかなか聞けなくなってしまう。

A さんのケースは、興味を活かす教育支援の難しさを端的に表しているケースである。アスペルガー症候群の場合、偏向的に興味のあるものへと集中してしまう傾向があり、頑固さ、マイペースさと表現される、自分のルールに従って行動する特徴がある⁽¹⁰⁾。やりたいことが阻止されたとき、かんしゃく（パニック状態）を起こすことも多い。これは、注意の固着、つまり、フォーカスされた注意の解放や、注意を別の対象へシフトすることが困難であることが影響している⁽¹¹⁾。A さんにとって、K 学級が 4 日間の母学級のストレスを解消する場になっていることから、K 学級で学ぶことの難しさがある。

簡単な感想文を書けるようになることを期待しているが、読んだ本のリストを書くことさえも難しいのが現状である。気が向くと長い文を書くことができるが、決まったテーマについて書く作文

や感想文は、非常に苦手である。

漫画を読むことが好きで、将来は漫画家になりたいというので、興味に基づき、漫画を用いて書く練習をさせようとしたが、本人をその気にさせることは難しく、なかなか乗ってこなかった。

そこで、母学級の担任と相談し、チェックリストに現れた、大好きなミミズやトカゲの観察記録をつけさせる試みを二学期から行うことにした。実際にこれらを飼って、その様子をパソコンのワード機能を用いて書かせ、さらに、ミミズやトカゲの様子をデジカメで撮り、パソコンに貼り付け、それらを合体させて最後に製本する。

漫画を「読むことが好き」でも、漫画を「書くこと」は、負担のようである。書く内容をまとめることが機能的に苦手、書くことに対してかなりの精神的負担があるようなので、ミミズやトカゲの観察記録をパソコンでつけ、集大成として製本するという試みは、うまくいくかもしれない。

このように、才能チェックリストに現れた興味や関心を活かす方法をいくつか試みて、子どもが一番好む方法を発見することが、この試みの成功の鍵となる。

・Bくん（3年生）ADHD（多動性—衝動性優勢型）

チェックリスト結果：〈推理・数字で〉〈自然物などを見分けて〉〈熱中性〉が全体的に高く、本が好きで集中して読む。〈将来の夢〉は特急の運転士になりたいという。

登校前に何らかの原因で親と衝突し、口論になると、それがその日の学習態度に影響を与え、学習にかなりのムラが生じ、その頻度も高い。

学習にムラがあるというのは、きっかけは親との関わりのようだが、遂行機能障害があり、やるべきことを行うための自己コントロールがうまくできていないことが原因として考えられる。また、注意の転導性が高く気が散りやすかったり、選択的注意力が弱くて、教師の話に集中できなかったりする可能性もある。

一般的に、ADHDの不注意は、必ずしもケアレスミスが多いとか、ぼんやりしているといったことばかりを指すわけではなく、自分が興味を持っている事柄に夢中になり、過集中の状態になっていて、注意の転換がうまくできないことも含まれる。ADHDにおける不注意の特徴は、注意のコントロールが損なわれている部分にあると考えられている⁽¹²⁾。Bくんの場合は、親との衝突が記憶に強く残り、学習にうまく注意を向けられないのかもしれない。その場合、教師は言葉掛けによって、学習にうまく誘導する必要がある。

もともと興味のある学習以外には消極的で、チェックリストにもあるように、数字に関するもの（算数）は得意であったので、自分で学習内容を選ぶ場面を設定した。すると、学年別に、教科書の学習順に振り分けられたプリントの棚の中から、割り算などの先の学習のプリントを選んでやる場面があった。また、社会科の教科書は、興味のある内容のところは、一人で先に先に読んでい

うである。チェックリストで、「特急電車の運転手になりたい」というように電車などの乗り物に興味があり、高学年向けの漫画の本である『乗り物』を集中して読む場面もあった。

Bくんは、興味のあるものなら自発的に学習プリントを先取りして行うことができるし、興味のある本は集中して読めるので、興味の対象を足がかりにして様々な事柄と関連づけていけば、少しずつ興味の範囲が拡がり、他教科の学習にも積極的に取り組めるようになるかもしれない。前準備として、興味の対象に関する読み物（物語、図鑑、インターネットで検索して出てきた説明）等で、まず読む力（基礎学力）をつけるとうまくいく可能性が高い。

一方的な関わりにはなりがちなものの、友だちと関わることは好きである。本が好きなので、音読も得意である。そのため、国語は、今までの個別課題中心の学習から、友だちと一緒に学習する時間を設定することにした。3年生の国語の教科書を扱った音読の場面では、友だちをリードするように上手に読むことができた。良い影響が出始めて、友だちとの良い関係作りも少しずつ見られるようになってきている。母学級の担任と連絡しあい、このような機会をひろげていくことを検討している。

相互的なピア・チュータリング（peer tutoring）を目指した試みがうまくいって、友だちとの良い関係づくりができてきたようである。その結果、自己肯定感が高まってきているのが感じられる。学習意欲の向上には、自己肯定感が必須である。これが二次的障害を防ぐ。

3. 良いところに応じた学習の工夫

つぎに、今回の試みの成果が一番出ているCくんに関して詳述する。日を追うごとに興味の対象が広がり、精神的に安定し、学習に対するやる気が出てきた様子が読み取れる。（[3-1, 3-2]は、北川教諭の観察記録からの抜粋である。[3-3]は、北川教諭が書かれた「今後の課題」である。）

3-1 対象児の特徴

Cくん（3年生）LD

〈興味のある題材を学習することから、苦手な学習にも前向きに学習できた例〉

昨年行ったWISC-IIIでは動作性のIQが言語性IQより20ほど高く、群指数では処理速度が他の三つの項目より30ほど高い。3年生になって、自尊感情の落ち込みが目立ち、「死ぬ」「うるさい」といった乱暴な言葉や行動が母学級で目立ってきた。昨年度末から通級し始めていたK学級に、今年になってからは来たがらないことが多かった。苦手な子がいたことが原因だと判明したので、違う曜日にしたら、5月の中頃から通級できるようになった。現在、少しずつ良い変化が見られているところである。

・才能チェックリストの実施結果

〈推理・数字で〉〈体を使って〉〈音楽の要素で〉〈熱中性〉は、得意なことが多く、特にパソコンに

は熱中する。同年齢の友だちよりも買い物には慣れていて、決まったお金でどれぐらいのものが買えるのか、といった知識はかなりあると本人は言う。朝の会での「歌」では、声を出して歌っている場面がよくみられる。〈ことばで〉〈自然物を見分けて〉は苦手なものが多い。〈将来の夢〉は、父親の影響で、モータースポーツの選手になりたいという。

3-2 学習支援の経緯

支援におけるエピソード（国語を中心として）

○5 / 28 3校時 国語

Cくんは怖い話に興味があるようで、自分から、絵本『死んでも生きている女』を持ってきて読んでいた。この日は学習プリントを用意していたが、彼の興味を大切に、この本と一緒に読むことにした。国語に対しては苦手意識が強く、文字を読んだり書いたりすることには難しい面があり、チェックリストにも同様の結果が出ていた。そこで、はじめは句点ごとに交代で読んでみたが、少し大変そうなので、教師が3/4位を読み、残りを彼が読むというような形で読み進めた。つかえたり、読み間違えたりはしたものの、好きな内容の本なので、意欲を持って読むことができた。教師が「次回もこの本の続きを読もうね」と言うと、うれしそうな笑顔を見せていた。

○5 / 28 4校時 自立活動（ゲーム）

自立活動の時間は、やりたいゲームを子どもたちで話し合っ決めて。前の時間からの流れで、「お化けゲーム」をやりたいという意見をCくんが提案した。教師がゲームの遊び方を一緒に考えて、隠れる役の子はおばけになって隠れる。そして、探しに来たオニをおどかすという「お化けかくれんぼ」を設定した。かくれんぼの楽しさに「お化けの役をする」という楽しさが加わり、Cくん以外の子どもたちにも好評で、非常にこの遊びは盛り上がった。Cくんは満足げだった。

○6 / 4 2校時 国語

怖い本の続きである。『三まいのおふだ』を読んだ。読む部分が長いと、「先生読んで」と依存するような言葉が出たが、怖がりながらも楽しそうな様子で聞いたり読んだりしていた。読んだ後に感想文を書いてもらおうと思ったが、一人で書くことは難しいようなので、彼の考えた内容を文節ごとに教師が言い、それを彼が書くという形で、本の題名や怖かった度合いを書いてもらった。

「『三まいのおふだ』は、あまりこわくなかった。だけどえがすこしこわかった。『ほんとうにあったかいだん』は10パーセントだけこわかった。よるには、ききたくない。三まいのおふだは、52パーセントこわかった。」

○6 / 11 3校時 国語

本を読みたいという気持ちがおばけ以外の本にも広がったようで、『かにむかし』を読みたいと持ってきた。ひらがなが主なので上手に読むことができたが、全体の量が長かったので、最後は飽きてしまった。

○6 / 25 2校時および昼休み

2校時からK学級に来たので、読む時間が短くなってしまい、15分程度『はなくそ太郎のぼうけん』

を一緒に読んだ。すぐに終わりの時間になってしまい、途中で中断した。続きを読みたいという意欲が強かったようで、「遊ぼう」という友だちの誘いを断ってまで、昼休みに絵本の続きを読んだ。「次はこんな敵が現れるに違いない」と、得意な〈数・推理〉の力も使って、先の内容を予測しながら楽しそうに読み進めていた。

○夏休み初旬

母学級での学習についていくことは難しいが、K学級では学習ができるようになってきた。しかし、保護者と面談を行い、休みに入ってから家での様子を聞くと、ふだんはゲームかパソコンで遊んでいる時間が多く、ほとんど学習（宿題）をしていないという。そこで、宿題ほどは難しくない、興味のある「迷路」や、自分でできそうな課題のプリントを取りに来るように伝えた。彼が来るかどうかは半信半疑であったが、明るい顔でK学級に来て、十数枚のプリントを選んで持ち帰った。その様子から、ちゃんとやってくれそうな気がした。

3-3 Cくんの今後の課題

Cくんは、多くの面で良い変化は表れているが、K学級での国語や算数での学習には消極的である。彼が積極的に学習するためには、チェックリストにあった〈推理・数字で〉をもっと学習に役立てていく必要があると思われる。国語の感想文では、独特の表現である「10パーセント」「52パーセント」などの表現を使っているところがある。「多い」「少ない」の意味以外にも、「みそ汁を自分が80パーセント作り、残りの20パーセントを兄が作った」などと表現することもあった。百分率を十分に理解しているわけではないが、100パーセントが「完成」ということは分かっている。数についてはある程度の知識を持っており、これらを深めることができるといいと考えている。

国語においても、本を選ぶときに、彼が興味を持てる、より面白いものを選ぶような教育支援ができるといいだろう。「かにむかし」は、何とか最後まで読めたが、できるだけ自力で読めるような、彼の読む力に応じた本を用意する必要がある。

チェックリストの〈音楽の要素で〉は、好きな項目が多い。音楽好きな友だちもいるので、朝の歌のみならず、楽器や歌を使って楽しく学習できる活動を増やしていけたらいいだろう。また、彼は、チェックリストに「モータースポーツの選手になりたい」と書いた。そのための道は険しく、実現の可能性は低い。しかし、彼が夢を実現するために努力していこうという気持ちは、学習に対する大きな動機付けになると考えられるので、大事にしていきたい。

3-4 Cくんに関する筆者の考察と、適した教育方法の例の提示

観察メモを見ると、二ヶ月足らずの間に、Cくんの良い変化が出ていることが分かる。

自己肯定感の低さから目立っていた「なんでだよ」「うるさい」などの乱暴な言葉は、その都度、教師が正しい言葉を教えることで、K学級では少しずつ減ってきている。しかし、母学級では、依然として特定の子とのトラブルが起りやすい。これは、彼の語彙が少ないことや、大人数での母学級では、大人の注意を引きたい気持ちが強くなりやすいこと、そして、特定の友だちからの刺激が

原因だと考えられる。K学級での学習の積み重ねにより、「できるものがある」という自信を少しずつ持ってくれており、母学級の担任も、できた場面で十分に褒めるように努力している。

乱暴な言葉は、うまく自身の感情を表現できないことから出ているものと思われる。これは、国語力の不足が原因として考えられる。また、精神的に不安定になっていると、不安感から言葉が乱暴になりがちで、このような場合、教師は心情をくみ取り、その心情を表す適切な言葉を繰り返し教えると、うまく心の内を表現できるようになる。乱暴な言葉はK学級では減っているということで、K学級は、Cくんにとって、精神的に安らげる場所になってきているのだろう。

北川教諭も母学級の担任も褒めることを心掛けており、このことは、とても大切なことである。なぜなら、学習と脳の報酬系は密接な関係を持つからである。褒められた「喜び」が神経回路構築を促進し、「やる気」へとつながっていく。

Cくんの検査結果を見ると、動作性IQが高く、処理速度も、他の項目より高い。この結果は、動作能力や視覚-運動処理過程の能力が高いということを意味する。また、この結果から、新しい状況に適応する能力である流動性知能⁽¹³⁾も高いと思われる。そのため、彼の場合、何かを学ぶ際には言葉で説明するよりも、体を使って学習できるようなこと、たとえば体験型学習にどんどんチャレンジさせて、興味の対象を広げるような機会を多く持つと良いだろう。

さらに、検査結果から、パズル系のものが得意だと読み取れるので、たとえば日本地図や特産品を暗記する際には、日本地図のジグソーパズルの裏に特産品の絵を描いて、遊びながら同時に暗記するといった方法も考えられる。

Cくんは、感想文を書くことが苦手ということで、抽象的な思考が苦手なようである。そのため、理路整然とアイデアを整理して、それを言語的にうまく表現することができないようである。そのため、抽象的な優れたアイデアがあったとしても、うまく表現できない。このような場合、概念の「視覚的地図化」を用いて考えを整理すると、効果的だと思われる。

これは、中心となる「考え」から始めて、蜘蛛の巣のように四方に関連する概念やことば、気持ち等をつなげて広げていくものである。頭の中だけで話を整理することが苦手な子どもの場合、実際に目で確認しながら話の内容を組み立てる作業は、分かりやすい。さらに、各教科で大事な要点をこのようにつなげていくと、事象のつながりが一目瞭然となる。この方法を用いて練習をすると、初めは教師の手助けが必要でも、慣れれば一人で感想文を書けるようになるかもしれない。

4. 北川教諭による、今回の実践の振り返り

チェックリストを実施する前にも、子どもの好きなことを学習に活用する場面はあった。しかし、体系的ではなく、行動観察に多大な時間がかかることが多かった。また、特別支援学級に通級している子どもの興味・関心の幅は狭く、偏りが見られることが多い。そのため、学習に活用することは難しかった。しかし、チェックリスト実施により、今まで教師の気がつかなかった好きなこと、得意な

こと、将来の夢などを短時間で見つけることができるようになった。ただし、学習に結びつけるのが難しい場合があることも事実である。いかに学習に結びつけるかが、今後の課題だろう。

チェックリストの項目については、検討すべき点がいくつかある。〈対人能力〉については、人とのコミュニケーションを苦手としている子どもたちが多いのは事実だが、「人とかかわること」が好きな子どもたちは多い。また、特定の友だちとなら、仲良く過ごすことのできる子どもも多い。項目や内容を検討する余地は、まだありそうである。

おわりに

子どもにはそれぞれ異なる興味の対象がある。しかし、内発的動機付けや、知的好奇心、自発的興味を重要視して個性化を唱える場合、危険なこともある。なぜなら、公教育としての学校では、将来のことまでを視野に入れて学力保障をしなければならず、興味のあることのみを傾倒的に学習させた場合、子どもの将来的選択肢を閉じてしまうことになりかねないからである。

しかし、発達障害があると、通常の教育方法では理解できないことが多く、興味の持てない学習に対しては、放棄してしまう傾向がある。そのため、教師が興味の対象を体系的に把握し、それを授業に活かすことができた場合、教育支援の可能性は広がる。

問題点としては、子どもによっては興味の対象に固着してしまい、学習が発展しないことである。その場合、Aさんの事例のように、いくつかの方法を試みて、いかに発展的な学習につなげていくかがポイントとなる。その際には、偏向的な興味が知的好奇心を誘発して、系統的な学習につなげていくような教育支援が望まれる。

「得意なもの」チェックリストの各項目の合計点で、ある程度、得意なものへの傾向はつかめる。しかし、個別の項目を検討しなければ、本当の興味の対象は掴めないし、良い所を見つけるには、チェックリストだけでは不十分で、保護者からの聴き取り、行動観察等の複合的手段が必要である。

特別支援教育の教師が行う指導は、よく「職人技」といった言われ方をする。この「職人技」を新任教師でも行えるようにする一つの可能性が、「得意なもの」チェックリストにあるように思われる。今後の課題は、北川教諭が指摘されるように、チェックリストの結果を「いかに学習に結びつけるか」といったことを具体的に体系化することである。

ところで、小倉正義らが行ったスクリーニングテストから、興味深い結果が出た。小倉らは、ある小学校で通常学級の一年生から三年生を対象にして、学習につまずく児童のスクリーニングテストを実施した。その結果、認知情報処理能力に何らかの偏りがあると予想されたり、当該学年の学習到達度に遅れが見られたりすると思われる児童は、被験者全体の約3割ということであった⁽¹⁴⁾。WISC-IIIを実施した結果、言語性IQと動作性IQの差、群指数間の差、下位検査のプロフィールなどから、被験者のほとんどの児童が認知情報処理の何らかの偏りをもっていることが分かり、中には、言語性IQと動作性IQの差が40ほどもある児童がいたそうである。このことから、小倉は、少なくとも二割程度の児童が、かなり個性的な認知的個性をもつ、と指摘している。

この結果から、特別支援学級に通級していない児童の中にも、今回の試みのような教育支援が必要な場合があることが分かる。学習に対してやる気を失っている子どもに対して、導入として、自身が興味を持つテーマを教材として用いれば、学ぶ意欲が出てくるかもしれない。教育関係者は、子ども一人ひとりの認知的個性を考慮する必要がある。

[付記] 本論文は、事例記録については、北川圭一教諭との共著と言ってよいものである。記して感謝する次第です。

- 注(1) 野添絹子「発達障害と才能を併せ持つ子どものための教育方法の工夫—2E（二重の特別支援）教育の新しい支援のあり方 RTI について—」『アメリカ教育学会紀要』第 20 号，2009 年，pp. 31-44.
- (2) Tomlinson, C. A., *The Differentiated Classroom: Responding to the Needs of All Learners.*, Alexandria, VA: ASCD, 1999.
- Tomlinson, C. A., *How to Differentiate Instruction in Mixed-Ability Classroom* (2nd Ed.), Alexandria, VA: ASCD, 2001.
- (3) 松村暢隆『アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援—』東信堂，2003 年，p. 50.
- (4) 岩永雅也・松村暢隆『才能と教育—個性と才能の新たなる地平へ—』放送大学教育振興会，2010 年，p. 190.
- (5) 同上書，p. 36.
- (6) 才能チェックリスト，「自分の取り組みやすい活動チェックシート」（未発表）
- (7) 障害のある子どもの「将来の夢」の実現に向けて，具体的な方法を検討するための取り組みで，1991 年にカナダにおいて，インクルージョン教育を推進するために開発されたものである。
- (8) 「得意なもの」チェックリストに用いたいいくつかの言葉は，一般的に馴染みのないものが含まれる。たとえば，「ナンプレ」は， 9×9 の正方形の枠内に 1～9 までの数字を入れるペンシルパズルの一つである。数独とも言うが，日本では一般的に，「ナンバープレート」（ナンプレ）と呼ばれる。「任天堂 DS」は，任天堂が開発したゲーム機で，“Dual Screen”つまり，二つの液晶画面を持つものである。「ポケモン」は，幼児向けアニメ番組で，架空の生き物が登場する冒険物語である。現在までに発見されたポケモンは，500 種を超える。
- (9) ここでいう「母学級」は，K 学級以外に，週 4 日を過ごす学級のことを指す。
- (10) 杉山登志郎（編）『アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート』学習研究社，2002 年，p. 26.
- (11) Courchesne, E., Townsend, J., Akshoomoff, N. A., Saitoh, O., Yeung-Courchesne, R., Lincoln, A. J., James, H. E., Haas, R. H., Schreibman, L., & Lau, L. *Impairment in shifting attention in autistic and cerebellar patients. Behavioral Neuroscience*, 108, 1994, pp. 848-865.
- (12) 宇野宏幸・井澤信三・小島道生（編）『発達障害研究から考える通常学級の授業づくり—心理学，脳科学の視点による新しい教育実践—』金子書房，2010 年，p. 16.
- (13) キャッテル（1968, 1971）とホーン（1968）が理論化した知的機能で，新奇的課題，特に適応力や，柔軟性のある思考を必要とする課題を解決する能力である。
- (14) 小倉正義「一人ひとりの才能が生きる教育システムの構築を」『実践障害児教育』学研教育出版，2010 年，Vol. 446（8月号），pp. 14-15.